

令和7年度 富山市総合教育会議 会議録

1 日 時 令和7年11月26日（水曜日）

午前 10時00分開会

午前 11時00分閉会

2 場 所 議会棟8階 第4委員会室

3 出席者 富山市長 藤井裕久

富山市教育委員会

教育長 宮口克志

委員 若林啓介

委員 藤井久丈

委員 高田健

委員 石動瑞代

事務局関係

教育委員会事務局

事務局長 野嶽誠司

事務局次長（総務・社会教育担当） 高田興真

事務局次長（学校教育担当） 河原弘幸

事務局参事（施設管理担当） 佐伯誠司

教育総務課長 竹内孝

学校再編推進課長 山崎悟

学校施設課長 高波宏明

学校教育課長 大窪智恵子

学校保健課長	舩 田 恵 美
生涯学習課長	加 藤 孝 一
教育センター所長	山 岸 朋 子
教育総務課主幹	高 岡 太 郎
教育総務課長代理	塚 本 紘 己
教育総務課管理係主任	福 島 魁 人
企画管理部	
企画調整課長	山 口 雅 之
企画調整課主幹	有 馬 俊 輔

4 議 題 等

議題 「不登校児童生徒対策について」

- ① 校内サポートルーム設置状況について
- ② メタバースの実施状況について
- ③ 古志はるかぜ学園の募集

選考状況について

5 会議の要旨

○開会

○市長あいさつ

○議題 「不登校児童生徒対策について」

学校教育課長から、次の説明を行った。

- ① 校内サポートルーム設置状況について

○意見交換

【藤井市長】

本市における不登校児童生徒への支援については、これまでも教育委員会が中心となって様々な施策が実施されている。児童生徒の登校復帰や社会的自立に向けた支援が行われてきたところであるが、その背景や要因が多様化・複雑化しており、本市の教育においても課題の一つであると強く認識している。本日は、改めて事務局からの説明を受け、意見交換をしたいと考えている。

【若林委員】

校内サポートルームの設置については、しっかりとした実績を上げていると思うため、その点に関しては良いことだと思うが、理想を言えば、できる限り多くの学校に指導員を配置してもらえたらと思っている。子どもたちの不登校の原因は多岐に渡るため、不登校になった原因が果たしてどこにあるのかということをしてできる限り解明するよう努力をしていく必要があると思う。もちろん予算や学校の規模等の問題もあると思うが、できる限り多くの学校に指導員の配置を充足させ、子どもたちの不登校の原因をもう少し丁寧に探ることができれば非常に良いかと思う。また、「学校に行く」ということを非常に重視しているという点が少し気になる点であり、それは大切なことだと思うが、学校に行かせることが本来的な目的ではないはずであり、学校に行かなかったとしても、必要な能力や社会性の取得ができるのであれば、それに越したことはないと思う。そのため、「学校に行くこと」と「真の教育目的」を考えると、登校することを目的とするよりも、もう少し違う角度から見てみることも必要なのではないかと思う。

【藤井委員】

私自身の「学校に行く」というイメージが少しずつ変わってきており、「学校に行く」ということは、学校の門をくぐって中に入るというようなイメージがあったが、ますます心の拠り所となる学校というものを作っていく方向になっ

てきていると思うようになった。校内サポートルームは、特殊な状態になった子どもたちが通う場所であるというイメージを持っていたが、校内サポートルームを子どもたちが上手に使用することによって、学校に対する親しみや学校に行きやすい状況が生まれ、段々と利用する子どもたちが増えていくことで、子どもたちの多様な教育の場の一つであるというイメージを明確に持つようになった。利用が少ない方が良いのではなく、利用が多い方がより子どもたちの多様な教育の場として、ふさわしいのではないかと思う。先生が板書したことをそのままノートに書き写す時代からアクティブラーニングのように子どもたちが主体的に学ぶ学習が取り入れられている中で、その学び方についても、子どもたちにとって多様性があると思う。その意味で、押し付けられるのではなく、自分の中で教育をしていく場の一つとして、校内サポートルームを設置したことについては、非常に効果が出ているのではないかと思う。

【石動委員】

校内サポートルームの効果が現れている一方で、不登校出現率等を見ると、学校の在り方自体を考えていく必要もあるという各委員の意見は、その通りであると思う。ただ、富山市では子どもの不登校の段階に応じて、様々なサービスを考えていることが大変素晴らしく、校内サポートルームというのは、学校には行ける又は行きたいが、クラスの生活には少し溶け込めない子どもたちが対象になると思っている。今現在、学校に行けることは非常に大きいことで、学校生活の流れにのり、何らかの人間関係を経験できるメリットがある。このような「学校に行ける」という状態を大切かつ丁寧に子どもに合わせて関わり、何に困っているかなどを指導員と一緒に見つけることによって、子ども自身が次の道を選択し、歩いていくことができると思う。そのため、指導員が学校に戻ることを迫るのではなく、一人一人の子どもの歩む道をサポートできるように上手く機能していければ、一人一人が思い描いていた学校生活ができるのではないか。また、保護者にとっても、日中の生活の居場所が学校にあることは、非常に安心だと思う。「学校という場に行ける」不登校の段階を大切にする意味で、校内サポートルームは重要だと思う。

気になることとしては、校内サポートルームが周囲の子どもたちにどのよう

に認識されているかである。保健室ではなく、校内サポートルームに通うことは、対象となる子どもにとって、病気ではなく、自分に合った学校生活の場であるという意識が持てるため、少し前向きになれると思うが、校内サポートルームに通っていない子どもたちも肯定的に見れるような配慮をしなければ、上手く機能しないこともあるかもしれない。校内サポートルームのような場所が、皆の学校生活にとって必要であるということを、不登校ではない子どもたちにも理解してもらえるよう伝えていくことが大切ではないかと思う。

【高田委員】

校内サポートルームは令和6年度から設置が始まっており、「令和6年度については、利用児童生徒（218人）の83.5%に改善傾向がみられた。」と資料に記載されていることから、不登校児童生徒対策としてしっかりと役割を果たしていると思う。また、令和7年度からさらに設置校を増やしており、おそらく不登校の出現率が高い小・中学校から配置して、徐々に増やしていくということだと思うが、富山県及び富山市においても人口は減っており、人に限りがある中で、指導員を増やしていくことは厳しい状況ではないかと思う。そういった中で、個人的には、できる限り学校で子どもたちがしっかり教育を受けてほしいという思いがあり、もちろん様々な理由で人と付き合うことが苦手な子どもたちが増えているということも分かるが、例えば、凄い能力を持っている子どもであれば、大人になっても様々な人と関わらずに生きていける可能性があるかもしれないが、多くの人は様々な人と協力しながら、決められたコミュニティの中で仕事をして生きていく必要があると思う。そういった意味では、学校というコミュニティの中でコミュニケーションを取りながら協力して生きていく力を身に付けることが大切ではないかと思う。校内サポートルームについては、もちろん改善傾向が見られているということで、役割は果たしており、良いことだと思うが、やはり、できる限り不登校の子どもを減らしていくことが大切だと思っている。学校に行けない理由は様々であり、最適な解決策は一概には言えないが、なぜ不登校なのかということ突き詰めていき、それが全ての事案に当てはまるか分からないが、少しでも不登校の子どもたちを減らしていくことが大切ではないかと思う。それについては、教育委員会及び

学校の先生だけでなく、家庭の協力もなければ解決しないと思うため、家庭の協力をもらいながら、不登校の子どもたちを少しでも減らし、全ての子どもたちにしっかりと教育を受ける機会を与えてほしいと思う。

【藤井市長】

教育長からご意見はあるか。

【宮口教育長】

指導員の資質ということで、校内サポートルームの設置が始まった時には、カウンセリング経験がある方や素養を持った教職員OBということで、人選には慎重に対応した。また、辞令交付の際には子どもの思いを第一に尊重し、子どもたちのやりたいことを大切に対応してほしいということを伝え、そういったことが全ての学校の指導員に浸透してきており、子どもたちが通いやすくなっているのではないかなと思う。石動委員が懸念されていた校内サポートルームに通っていない他の子どもたちについて、複数の学校から「給食を一緒に食べに行こう」など誘いに来てくれる子どもたちがいるということで報告を受けており、他の子どもが友達意識を持って気にかけてくれているということは非常に良いことだと思っている。そういったことが、自分は一人ではなく、仲間がいるということに繋がり、一緒に授業を受けようという時間も増えている要因の一つだと思っている。私自身もこの校内サポートルームを昨年度から設置が始まった頃から「目標は0」ということで、校内サポートルームが無くなるということは、皆が安心して教室に行き仲間や先生と過ごすことができる学校作りになっているということだと思っている。子どもたちの主体性を育むことであったり、イエナプランで一人一人の個性を大切にしようというような考え方が普段の授業や教育活動の中で行われていくような学校作りが非常に重要ではないかなと思っている。また、不登校が改善してきた要因をいくつか聴いているが、その中で、子どもたちと先生との対話が増えてきているということで、子どもたちの思いを聴いてあげる時間が増えることにより、子どもたちから見れば、「自分は一人ではない」であったり、「先生が自分のことを気にかけてくれている」というメッセージにもなり、保護者の学校に対する信頼感が高

まることにも繋がっているのではないかと思います。そして、子どもたちは自分のやりたいことを自分で決めて、自分のペースで学ぶことができることが保障されていることで、「自分の居場所はここにある」という実感ができる、そういった学校教育を目指していきたいと思っている。

【藤井市長】

学校そのもののあり方も柔軟に考え、児童生徒が通いやすい居場所を作ることは大切であり、校内サポートルームもその一つの事例だと思うが、教室に中々馴染めない子どもたちが学校に行けるということは素晴らしいことではないかと思う。また、校内サポートルームに通う子どもたちと他の子どもたちや先生との関係が上手く構築できているというお話もあったが、校内サポートルームをきっかけに人間関係が上手く構築できるようになってきていることは非常に素晴らしいことだと思う。皆様から様々なご意見をいただき、引き続き校内サポートルームの充実ということをしっかりと進めていくべきであると思う。

次に、教育センター所長から、次の説明を行った。

② メタバースの実施状況について

○意見交換

【藤井市長】

このことについて、ご意見はあるか。

【若林委員】

実施期間が令和8年3月31日までとなっているが、来年で終了することか。

【教育センター所長】

予算の関係上、資料は令和7年度までの記載となっているが、来年度も継続する予定である。

【藤井委員】

繰り返しになるが、学校の門をくぐったら、学校に行ったことになるイメージであったが、学校が様々な意味での心の拠り所であり、そこに集まれば、学校の仲間や先生に会えるというような、一つのコミュニティに参加することが学校に行ったことになるということを考えた際に、学校に実際に行かなくても、学校に行ったことになるということが、最初の頃はあまり理解できず、本当に不登校の子どもたちを登校させることに繋がるというイメージが湧かなかったが、改めて考えてみると、人との繋がりが希薄になりやすい不登校の子どもたちであったり、社会的な繋がりが上手くできない子どもたちにとっての一つの入口という意味では非常に良いと思う。また、メタバースの運用について、仮にメタバース空間で何でもできるようにしてしまうのか、とにかく人と会うことで繋がりをを感じる程度に留めるのかという方向性が現段階では不透明であるが、とりあえず実施してみないことには分からないと思うため、どのように今後作り込んでいくのか、楽しみであると同時に不安も感じる。

【石動委員】

校内サポートルームは、学校には行けるが、クラスの人間関係や生活には少し溶け込めないという子どもたちが対象であったが、メタバースについては、学校には行けない、あるいは家から出られない子どもたちを対象としていると思う。メタバースに参加することにより、学校に行かなくても、しっかりと皆が見守っているというメッセージにもなると思うので、非常に良いものだと思う。自宅にいる不登校の子どもたちというのは、中々生活リズムを自分で作っていけないというところがあると思っており、仮に毎回参加できないとしても、平日の10時から12時、13時から15時という昼間の時間帯に、参加しようと意識する環境があるだけでも、生活リズムを崩さない効果がある。また、家族以外の繋がりが中々持てない子どもたちにとって、自分を開示せずに誰かとつながる経験は必要なことだと思う。ただ、メタバースに留まり続けることは、その子どもたちのためにもならないとも思う。社会で活躍している方で、小学校や中学校時代は不登校であったが、その後様々な才能を発揮していると

いう事例もよく聴くが、不登校時代のすごし方が大切だと思う。アバターを通して自己表現をしたり、コミュニケーションを取ったりすることで自信を高めていき、次に繋げていくということを大切にしたら良いのではないか。メタバースは「必要ではあるが、膨らみすぎない」という方針で行っていくことが良いのではないかと思う。

【高田委員】

累積アカウント配布数が合計で27名、累計アカウント利用数が合計21名となっているが、このメタバースを利用している児童の中で校内サポートルームも利用している児童もいるのか。

【教育センター所長】

そういう子どももいるということは聴いている。

【高田委員】

メタバースはどちらかというと校内サポートルームや適応指導教室に行けない子どもたちが利用すると思われるが、そういった意味では、人とのつながりや関わり合いがない子どもたちが少しでもつながりを持ちたいということで、こういった仮想空間を利用することは、始めの一步としては良いことだと思う。メタバースで様々な人と関わり合いを持ちながら、最終的には現実の社会の人たちと関われるようになってくれればと思うが、今年から開始したこともあり、まずは少しやってみてということになると思うが、あくまで仮想空間のため、最終的には現実の社会の人たちと関わり合えるようにしていくことが大切だと思う。まずは実施したうえで、その後どのように展開するかということが課題であると思うため、そこをしっかりと考えていく必要があると思う。また、以前にメタバースを見学させてもらったが、支援する側の職員は基本的に平日は毎日同じ職員が支援しているのか。毎日この空間に入ることは大変だと思うため、今後も長く続けることができるように体制を整えてほしいと思う。

【教育センター所長】

基本的に同じ職員が対応することになるが、体調不良等もあると思うため、教育センターの教育相談係の中でサポートし合えるように体制作りを行っている。

【藤井市長】

教育長からご意見はあるか。

【宮口教育長】

各委員からご意見いただきましたが、校内サポートルームは学校に来ることはできるが、教室に入れない子どもたちを主に対象としており、メタバースは外出機会がなく、家族以外との接触がない子どもたちをどう支援するかということで始めた事業である。やはり、不登校を一括りにしても様々な対応があるため、それぞれの子どもたちの現実に合わせて、どう対応してあげるか、社会的なつながりや居場所作りということがまずきっかけということであるが、富山市では指導員の方が非常に丁寧にウェルカムセッションを行ってくれており、また、この時期にこれだけの人数が参加していることは他にはないということで業者の方も驚いていたというほど、しっかりと取組んでくれていると思う。そこで、資料4ページの「4.利用状況」に記載されているとおり、様々な効果が出ており、子どもたちからすると、初めて体験するような人との関わりの中で生まれる喜びではないかと思っている。まず何よりも、友達や指導者と対話できた喜びみたいなものを子どもたちが実感してくれて、次の段階に進んでくればと思っている。まだまだ学校に行くことができない子どもたちはいるが、保護者への働きかけをしっかりと行い、参加してくれる子どもたちを増やしていくことで、子どもたちが一步步ずつ前進できるように教育委員会もしっかりと対応していきたいと思っている。

【藤井市長】

教育長にまとめていただいたが、本当にそのとおりだと思う。メタバース空間で会話を取るということは第一目的であり、そこを大切にしていきたいと思う。また、その後の子どもたちがどうなってほしいかということもしっかりと

考えながら、メタバース空間を運営していくことが非常に大切であると思う。

次に、学校教育課長から、次の説明を行った。

③ 古志はるかぜ学園の募集及び選考状況について

○意見交換

【藤井市長】

このことについて、ご意見はあるか。

【若林委員】

ある程度の関心を持つ保護者及び児童生徒がいると思われ、これも不登校児童生徒対策として一つの選択肢になるかと思う。以前に岐阜市の草潤中学校へ視察した際には、学校に来ない子どもたちが本当に来るのかという話をしていたが、実際に学校説明会の申込みが来ていたという状況の中で、子どもたちが転入学した後、どれくらい継続的に通うことができるのかなど様々なことを検証する機会にもなり、非常に良い試みだと思う。学校までの交通が不便だということが少し気になる場所であるが、仮に非常に効果的であることが検証できれば、また別の場所で追加で設置するようなことも将来的には考えていければ良いと思う。

【藤井委員】

従来の学校というものには合わない子どもたちが集まり、自由な雰囲気になってくると、段々と応募する子どもたちが増えてくとも考えられる。そうになると、様々な子どもたちが集まることになり、もしかすると校内サポートルームがまた必要になるというようなこともあるかもしれないが、将来この古志はるかぜ学園を卒業した子どもたちの中から社会的に活躍する人たちが出るのではないかとしたり、あるいは古志はるかぜ学園にぜひ転入学させたいと考える保護者も増えてくるのではないかなと思うため、これから数年間の結果が非常に楽しみである。

【石動委員】

古志はるかぜ学園に集まってくる子どもたちについて、全てではないかもしれないが、既存の学校システムに合わない部分があるけれど、何か新しいものを作るエネルギーがある子どもたちではないかと非常に期待をしている。また、社会が非常に変化している中で、社会で求められる人材や能力も変化していることに比べて、学校教育の変化の速度が遅いのではないかと感じており、こういう新しいシステムの学校を作ることで、既存の学校のシステムのどこを変えていけば良いのかという手がかりを示唆してくれるのではないかなと思う。もちろん、様々な個性を持つ子どもたちがいて、大変なこともたくさんあるかと思うが、必ずしも既存の集団に入らなくても、個々の実力を発揮できる社会になってきていると思うため、このような新しいシステムの学校を作るとはとても良いことだと思う。学校は学習だけでなく生活経験の場としてとても大切である。おそらく、この学校に行けば、今まで参加できなかった行事などを自分の発案で作り上げることもできるのではないかな。本来、小学校及び中学校の時期に、クラスの仲間と経験してほしいような体験を、一旦は諦めた子どももいるかもしれない。それが、また経験できるようになり、その中で認められる経験を重ねていくといった具合に、上手く学校生活が機能していくことを期待している。懸念点としては、学校であるため、どうしても評価というものを伴うことである。評価のために必ずテストを実施するというのではなく、何か新しい子どもたちのための評価方法等を検討していただき、「この学校に入って良かった」と思えるような学校になってほしいと思う。

【高田委員】

学校説明会で91名の申込みがあったということで、学校に行きたくても、何らかの理由で行けない子どもたちがたくさんいることが分かり、申込みがあったことも良かったと思う。以前に教育委員の学校訪問で古志はるかぜ学園が設置される浜黒崎小学校を実際に見学したが、校舎は綺麗で学校の目の前に海があるため、勉強以外で遊んだりするにも非常に良い環境だと思う。また、各教室入口の学級番号が印字された看板について、取り外しできるかという話を

していた中で、その看板についても、この古志はるかぜ学園に入ってくる子どもたちに作ってもらうのも良いのではないかという話もあり、様々なことができる学校にしてほしいと思う。また、現在富山市内にある小学校及び中学校とは異なる学校であり、先生たちがどのようにその子どもたちと接すれば良いかということは非常に難しいことだと思うため、研修や先進自治体との意見交換等を通して、先生たちにしっかりと勉強してもらったうえで、この新しい学校を始めてもらいたいと思う。

【藤井市長】

教育長からご意見はあるか。

【宮口教育長】

学校に来ない子どもたちが果たして本当に来るのかということで、以前に岐阜市の草潤中学校へ教育委員の皆様と一緒に視察した際に、何百人もの入学希望の申込みがきているという話を聴いて驚いたが、富山市においても学校説明会に91名もの申込みがあった。その中で嬉しいエピソードを紹介すると、面談を保護者と子どもとで別々に実施したときに、子どもの母親が自分の子どもは本当に知らない人のところに行って面談できるのだろうかと心配していたが、しっかりと面談できたという話を聴いて母親が涙を流し、その姿を子どもは見ていたと思うが、そこに親子の愛情であったり、自分は一人ではないということを感じたりということがあったのではないかなというようなことがあった。また、富山市の小学校及び中学校の全ての教員の意識改革や授業改善を進めている最中であるが、学校そのものがこれまでの型からどのように殻を破っていくかという考え方をできる範囲で学校教育全体に波及していきたいと思っている。教員が一方的に自分の考えたスケジュールで授業をしていく形から、子ども一人一人の思いをできる限り尊重した教育ということをお願いしたいと思う。また、この学校では、今のところ校則はない想定で、ある意味、学校らしくない学校ということで、子どもたちが自分たちの学校を作り上げていくというそういう発想に立ってくれればと思う。また、教員の関わり方ということもあったが、富山市の中では、そういう意識が少しずつ芽生えてきており、そういった

ことを勉強していきたいということで手を挙げる教員も増えてきており、研修等を通して意識が変わってきているという中にあって、ある意味、富山市の学校のモデルになっていければ良いと思っている。同じようなことを全ての学校でできる訳ではないが、子ども一人一人を大切にするという教育の原点がこの中にあるということで、そういったことを大切にしていきたいと思う。課題は多いかと思うが、しっかりとそういった方向性に向けて準備していきたいと思っている。

【藤井市長】

様々なご意見をいただき、いずれもその通りだと思う。この学びの多様化学校は富山市としても初めての学校となり、これから学びに来てくれる子どもたちが自分たちで学校を作り上げていくということが非常に重要だと思う。物理的な面で言うと、浜黒崎は離れた場所に位置しているが、公共交通があるという面では補完していることもあり、海沿いの地域で「古志の松原」でも知られているように松林が彩っており、さらには、人間関係も温かく、自治会や町内会がしっかりと機能しているところであるため、今までの浜黒崎小学校と変わらずこの古志はるかぜ学園と関わってくれる地域の方々がたくさんいるため、そういった面からも、地域の大人と触れ合う機会がたくさんあるのではないかなと思う。いずれにしても、子どもたち一人一人の思いや考えなどをしっかりと大切にすることができる学校にしていければと思う。また、意見交換の全体を通して再認識したこととして、教育の姿というものは決して一つではなく、文部科学省の学習指導要領に則り学校を運営していくことは大切であるが、その型にはまらない子どもたちも教育を受ける権利があり、我々大人たちは教育をしていく義務があると思うため、多様な形になるかもしれないが、そこをしっかりと考えていく必要があると思う。また、教育委員の皆様からもっと柔軟に考えても良いのではないかなというご意見もいくつかいただき、我々も含めてさらに柔軟に考えていければと思い、今後も教育委員会と市長部局と学校現場が、しっかりと意思疎通しながら、富山市の教育を進めてまいりたい。

それでは、事務局に進行をお返ししたいと思います。

【高岡主幹】

本日は、貴重なご意見等をいただき、ありがとうございました。

この総合教育会議は、本市の教育分野における課題やあるべき姿を共有し、地方公共団体の長の権限に属する事務との調和を図ることを目的としていることから、本日、頂いたご意見につきましては、必要に応じ、市長部局との意思疎通を図りながら、職務の遂行に万全を期してまいります。

○閉 会